

聞こえない声にも耳を

関市教育委員会 教育委員 足立 司郎

私は、約半世紀にわたって教育関係の仕事一筋に従事してきましたが、その間には、私のものの見方や考え方、人との関わり方などに大きな影響をもたらしたことがありました。それまでの私は、どちらかといえば先生が知識や技能を「教える」、「身につけさせる」ということに重点を置いた、いわゆる「育てるんだ」という、意気込んだ姿勢であったように思います。ところが30代半ばの頃、岐阜県教育センター（現岐阜県総合教育センター）で「教育相談」について学ぶ機会が与えられたときのことですが、当時の相談部には次のような言葉が額に掲げられていました。

『人間は誰でも、生長し発展し適応へと向かう資質をもっている』（カールロジャーズ）

人は「育とう」とする力を本来持っているのだという言葉に、とても衝撃を受けたのを覚えています。さらには、この研修期間中、私も実際に教育分析としてのカウンセリングを受け、自身を振り返ることでこの言葉の意味を実感しました。研修後数年たって、今度は所員として教育センターで、不登校や非行、家庭内暴力などの問題に直面している、多くの児童生徒や保護者の方々の相談に関ることになりましたが、その相談の中からも、「自分はどうなってもいい」と本当に思っている人はいないことを実感するとともに、「より良くなりたい、何とかしたい、困難から抜け出したい、改善したい」などといった、むしろ「願い」を持っていることを思い知らされました。まさに「生長し発展し適応へと」向かおうとしているのです。

また、改定前の生徒指導資料第15集（文科省）では、「教育相談とは、児童生徒自身が現在の自分の問題について、どのようにしたらその問題を解決できるかについて自己洞察し、自らの内に持つ力によって自己変容していくことを、援助する過程である」と述べています。人というのは、本来自らの内に変容していこうとする力というものを持ち合わせている。だから、その力を発揮できるように引き出す援助をすることである、ということが出来ます。教育相談を学ぶ以前の私には、このことが信じられていなかったと思います。現在は、一般の方々のカウンセリングを行っていますが、このことを礎として、相談に来られる人の「内に持つ力」を信じて、その力が発揮できるようにと支援をしているところです。

ここで二つの事例を取り上げたいと思います。

先日、某小学校の校門での先生とのやり取りの話を聴きましたが、皆さんはどう思われるでしょうか。不登校で休んでいた児童が、お父さんの「校門まで帰ってもいいので一緒に行こう」との言葉にうながされて、手をつないで、やっとの思いで学校に行ったところ、校門に立っていた教頭先生が、「あれえ、かばんも持たずにどうしたんだろうね」と言われたそうです。なんと心無い言葉でしょうか。そのためか、その後も不登校の状態が続いているそうです。やっとの思いで登校してきた児童の思いに目を向けて、「よく頑張ってきたね」とか「待っていたよ」とかどうして言えなかったのでしょうか。お父さんは、怒りの気持ちと同時に失望したと言われました。子どもたちとの関係は良好だそうですので、この児童の不登校の要因は、先生方との関係が見え隠れしているように思われてなりません。一般的には目に見える行動や言葉に目が向きやすいのも確かですが、もし先生方が、この児童の声になっていないところに目を向け、耳を傾け、この「内に持つ力」が発揮できるような言葉が

けなどの援助をされていたなら、不登校の状態をさらに引き延ばすことはなかっただろうにと思われます。「育つ」力が削がれてしまったと感じます。残念でなりません。

二つ目ですが、先生になることを目指している学生が、教職課程を履修するのをやめようかと悩んでいるという相談です。理由を尋ねると、インターンシップである中学校へ行ったとき、数人の生徒を前にして先生がすごい剣幕で怒りをぶつけている場面を目撃したそうです。「生徒達は怖さのあまりに震えあがり、声は震え、手足は緊張で固まっていた。叱られるには何らかのことがあったのだらうけども、何も恐怖を覚えさせるまでもなくても指導することはできるだらうにと思った。それ以来、先生という仕事にあこがれを持っていたけれども、疑問を感じるようになり、自分もそうになってしまうのではないかといった不安を抱くようになってしまいました」と喪失感でいっぱいの様子で話してくれました。この時の先生は、どんなお考えで生徒に向かっておられたのでしょうか。かつての私のように、「育てるんだ」と意気込み過ぎておられたということはないのでしょうか。いずれにしても、問題であった行動等について注意を与えることは大切なことではあります。この事例からは、生徒たちが自分たちの取った行動等について振り返り、見つめなおし、改善していくという、人として「育つ」機会が失われてしまっていると思われます。それは、「内に持つ力」というのは自己洞察を深めることを通して、「育つ」と思いうからなのです。

終わりに、大切にしてほしいと思っていることを二つ上げたいと思います。

一つは、私たち大人には、子どもたちが一人の人格者となるべく「育てる」という責務がありますが、そこに子どもたち自身も、「育つ」という力を「内に」持ち合わせていることを改めて再認識し、声にはならないその力を信じて、人格を「高める」べく援助しながら「育てる」という、姿勢や考え方を持つ必要があるのではないかとと思います。どちらかに重点を置いてというものではないと思います。

二つ目は、日頃、どんな姿勢や考え方で人と関わっているかによって、同じ言葉を発したとしても好意的に受け止められる人もあれば、そうでない人も出てくるということです。その違いは、普段の言動の中に現れる人間性によるところが大きいのではないかとと思われます。どういう思いでとった言動なのかということころは、意外と相手には伝わっているものです。私たち大人は、こうしたところに少し意識を向けて、子どもたちに関わってあげてほしいと思います。

そこで、改めて考えさせられる言葉があります。それは、「マザー テレサ」の言葉です。

思考に気をつけなさい	それは、いつか言葉になるから
言葉に気をつけなさい	それは、いつか行動になるから
行動に気をつけなさい	それは、いつか習慣になるから
習慣に気をつけなさい	それは、いつか性格になるから
性格に気をつけなさい	それは、いつか運命になるから

ついつい日頃思っていることや考えていることというのは、無意識のうちに言葉や行動に現れ伝わりやすいものです。ですから、まず私たち大人が、子どもたちとの関わり方に限らず、日頃から、物事をどのように見、聴き、捉え、そしてそれをどのように考えていくかという「思考」のところを、大事にしていく必要があるのではないかとと思います。

先生方の一層のご活躍とご発展を祈念しております。

“関ヶ原は一つ” そして

関ヶ原町教育委員会 教育委員 長谷川妙子

私が子どもの頃通った「玉小学校」は40年程前に廃校となり新生「関ヶ原北小学校」に。

そして20年程前、私は「関ヶ原南小学校」に勤務。当時「関ヶ原北小学校」「関ヶ原中学校」「今須小中学校」とともに“関ヶ原は一つ”の合言葉の下、教育活動が熱心に展開されていた。先生方は『お隣へ行こう』と、機会があれば積極的に町内の学校へ授業を見に行ったり、教科部会で交流したりしてきた。その町内4校が各校の特色を活かしなが一つになって、総合的な学習の時間の研究発表会を行った。県外からも多くの先生方にお越しいただいたことを思い出す。今頃当時子ども達は、自分の持ち味を活かしながら、社会人として活躍していることと思う。

時は流れ、令和2年度に「今須小中学校」が廃校になり、令和3年度に新生「関ヶ原小学校・関ヶ原中学校」に統合され、形としても“関ヶ原は一つ”となった。今では、今須からの児童生徒たちもすっかり新しい学校生活に溶け込み、仲間とともに元気に学び、活動している。統合前の2年間、それぞれの学校の児童生徒や保護者の気持ちに寄り添い、細やかなステップで相互交流をしたりしてきたことが、大きな力となった。

関ヶ原町の教育の強みは、何と言っても学校と教育委員会との連携のよさだと思う。“関ヶ原は一つ”の合言葉の下、絶妙な指導や寄り添いも注目。7年間の太くて力強い教育のブランド化への歩みは、今では「ブランドづくり・磨き」から「ブランド発輝」へ向かっている。

ブランドとは、まず自分たちが目標に向かって弛みない努力を重ね、自信をもって向こうに見えてくるもの。何より日常の教育活動の中に滲み出てくるものであろうと、私は考える。特に、教科指導、小中一貫した指導、ふるさと教育を充実させる中で表出されること。教師だけでなく、児童生徒も保護者も地域の人々も、関ヶ原町の学校教育のよさを実感し誇りに思うことができたなら、ピカピカのブランドになっていくだろう。さらに他の市町村の人々に、関ヶ原町の学校に通いたい、通わせたいと思ってもらえたら、過疎化が進む古戦場の町関ヶ原が、もっと元気になっていくことだろう。

私自身、子どもから高齢者までの地域密着の様々な活動に関わらせてもらっている。この触れ合う活動をどのように推進していくと、みんなの元気な笑顔に繋がるか。思いを巡らせることが山のようにあり、なかなかゴールが見えない日々を送っている。子どもたちが100歳頃まで生きることを浮かべ、地球人としての大切な心や丈夫な身体で、前を向いて生きていってほしいと微力ながら願いつつ。